

令和1年度事業報告書

特定非営利活動法人 アニマルクラブ石巻

事業の成果

■ 終活のスタート

いよいよ赤字収支となりました。以前より、そうなった時が終活の始まりだと認識していました。ボランティア活動は、人力と経済力が維持できなければ、継続できません。生き物を抱えていますので、当座の生活費は通帳に入ってはいますが、役員立替金であり、それ以上の立替はもう無理なのです。

これからは、今収容している猫と犬は何とか天寿を全うさせるように護り、NPOになる以前からの活動期間を数えれば40年余りに及ぶ経験を社会に伝え、行政に反映してもらうことを目標として、保護は極力行わないようにして徐々に負担を軽減、活動を縮小していくしか術はないと痛感しています。

なぜこうなってしまったかという、動物に関する相談をする側は、動物愛護団体を公的機関と認識しているケースが多いからです。マスコミにしろ、ネットの情報にしろ、多頭飼育の崩壊や動物虐待事件を解決してくれるのが、動物ボランティアであるかのようなストーリーを提示しています。「あんな風に助けて！」と言わんばかりの人達が、「可哀想でそのままにしておけなかったから、保護した」と連絡をよこし、中には直接連れて来る人もいて...「預かることもできないし、お金も出せない」と自分の都合ばかり主張します。「引き取ることはできませんよ」と答えると、「じゃあ、放っておけば良かったんですか？」と怒り出す人もいます。

可哀想で放っておけないと判断したのは自分なのですから、「その命を助けるためにアドバイスやサポートを受けたい」と言う人達になら、できる限り協力するのが私達のスタンスです。誤解を説明して、理解して自分で頑張ってくれる人も一部います。逆ギレして「もう、いいです」と電話を切る人もいます。

■ 責任の所在

一番くせ者なのは、頭では解っても気持ちがついていかない人達です。助ける方を選び、自分で面倒を見る約束をしながら、何やかや理由をつけて、逃げ出されると...残された命を見捨てることはできなくなります。

週に1回開院している不妊予防センターに連れて来られた猫の中でも、結局アニマルクラブで保護することになったケースも多数あります。捨てられる命を生ませないために、低価格に設定して、さらに分割払いや送迎などを協力して、より受けやすくサポートしているのですが...手術に連れて来るのが遅すぎる人達があります。

野良猫に餌付けをしている人達が早々に避妊手術を決心しないのは、「家の猫ではない」という、辻褄の合わない言い訳です。そもそも家の猫ではないのに餌を与えて、それを頼りに生きているのに、所有権を持ち出しても何の効力もありません。「他の誰の猫でもないし、このままにしておいたら、誰が困るのか？」と考えれば、やるべきことは、明々白々です。

いよいよお腹がせり出して「明日にも子猫が生まれているのではないか？」という状況になって慌て出すのは、猫にとって非常に残酷なことです。獣医師から「母体が危険になるから、手術はやめた方が良い」と言われると、「困った、困った、産ませられない」と言い張るだけの人達に返せば、野良猫が増えるばかりです。

出産して、離乳して、避妊手術が受けられるようになるのは2カ月後です。子猫には里親が見つかったとしても、人馴れしていない母猫がアニマルクラブに残っていきます。中には費用も払わずに、連絡が取れなくなる人もいます。

■ 啓蒙活動と財団の設立

つまりは、いい加減な関わり方をしている人が多く、困れば丸投げする先を探すだけです。人間なら基本的人権があるから、見つけてさえもらえれば、助かる道が開けますが、動物は手を差し伸べた人が、労力も費用負担も背負わなければならないので、動物愛護団体はジリ貧に陥る構図となります。

この活動を始めた十代の頃から法整備を訴えてきましたが、動物たちが生きる権利はまだ保障されてはいません。それまでの間、苦境に瀕している動物たちを助けられる方法は...助けたいと願う人達が寄付する資金を、必要な所に回せる財団なのではないか?と思っています。

昔に比べれば、行政も動物のために予算を回してくれるようになりました。野良猫の不妊手術には県から助成金が出るようにもなりましたが、対象は飼い主のいない猫だけです。しかし現実には、経済的理由で手術を受けられないでいるうちに、増やしてしまった事例が多くあります。

あるいは、助成金を使って避妊手術してやろうと連れて来られた野良猫の足先に癌が見つかり、ここではできない断脚手術に10万円余りかかるとなったことがありました。連れて来た若い女性1人に、全額支払わせるとするのは無理があると感じました。獣医師は「中途半端な関わりしかできないのなら、何もしないで放せばいい」と言い、家族には「飼っているわけでもない猫にそんな大金出す余裕はない」と反対されたそうです。その忠告を正論とするなら、動物愛護は進みません。

このケースは、ホームページでカンパを募集して、手術代を捻出しました。皆さんの協力で手術するのだから、傷が完治したら、連れて来た彼女に引き取ってもらうこともお願いしました。

できる力を持ち寄って、役割分担して助けていく仕組み作りができれば、合理的に助けて行ける数は増えるでしょう。それには行政機関が一定条件を挙げて一線を引くやり方ではこぼれ落ちる、切実な現場を把握しているボランティアが、必要な費用の助成を申請をしていくべきです。

アニマルクラブではボランティアの高齢化も進み、持病が出たり、親の介護などで抜けてしまう人、前より来れなくなった人が出てきました。若い人は時々加わるのですが、長続きしない傾向があります。給料を支払っているわけではないので、後継者も望めません。人手の面からも、もう動物を保護することは無理なので、残された活動時間に、この財団設立の構想を進められれば...と考えています。

今後は啓蒙活動をメインにやっていくのが、残された道なので、3月、動物愛護啓発ポスターを製作しました。そして、仙台市青葉通り地下道ギャラリーで、パネル展を開催しました。これからもパネル展を企画していきます。また、これまでの活動のエピソードと、関わった動物たちのストーリーを、ボランティアの絵で紹介する作品集の出版を準備しています。